

機関番号：11301

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520105

研究課題名 (和文) コミックスの文化的認知に関する研究

研究課題名 (英文) On cultural legitimization of comics

研究代表者

森田 直子 (MORITA NAOKO)

東北大学・大学院情報科学研究科・准教授

研究者番号：40295118

研究成果の概要 (和文)：

本研究は、1970年代に入るまでは低級文化と見なされていたコミックスの文化的認知について、芸術、教育、文化的機構などとの関係から考察するものである。まずコミック作家が経験した文化的闘争の最古の一例として、19世紀スイスの作家ロドルフ・テプフェールの経歴をとりあげた。かれの理論的テキスト等の分析から当時におけるコミックスの文化的認知の困難さとその背景を明らかにした。また、現代の日本とフランスについて、コミックスと諸芸術の関係、子ども観、教育制度などの違いをふまえ、文化的認知度ををはかるための有効な方法論を吟味するとともに、今後の国際的なコミックス研究のありかたについて提言も行った。

研究成果の概要 (英文)：

Comics, considered as lowbrow products, have achieved a certain level of legitimization today. Our research aims to examine the relationships between comics and art, education, and cultural politics. We have conducted our research in two ways.

Firstly, we took up a 19th century Genevan writer Rodolphe Töpffer and his cultural struggles to achieve recognition. We could define the difficulty he faced and his strategy for promoting his comic works through a close reading of his theoretical texts.

Secondly, we have surveyed various methodologies to assess the level of legitimization of comics today in Japan and France, taking into consideration differences in the relation between comics and arts, position of children in the society, educational system. We have also made some suggestions for the future of international comics studies.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学；芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：表象文化論、コミック

1. 研究開始当初の背景

日本のマンガ、英語圏のコミック・ストリップ、フランス・ベルギーのバンド・デシネ等、各国における「絵物語」形式の出版物は「コミック（ス）」と総称される。この表現形式の定義については諸説あるが、1980年代ごろまでの「コミック史」記述においては洞窟壁画からタピストリー、ステンド・グラス、エビナール版画までをも「コミック」の祖とみなすのが通例であった。

その後、徐々にコミックの文化としての認知度が高まり、コミック研究は新しい学術的な段階に入っていく。一つには、その表現形態を記号としての機能という視点から考察するもので、図像と言葉の組み合わせ、吹き出しの使用、図像の連続による物語構成、同じ登場人物がくりかえし現れる点などが、コミック固有の体系として構造主義以降の記号論・物語論的分析の対象となった。

こうした非歴史的・内在的アプローチと並行して、コミックが大量複製技術による印刷物であることを重視し、コミックという表現形態と19世紀の複製技術・出版文化（定期刊行物と本）の展開とのかかわりを重視する立場も見られようになった。このアプローチは、現代におけるメディア・商品としての（しばしば国境を越える）コミックの流通・消費に関する研究、教育的かつ法的観点からみたコミック表現規制の研究にもつながっていた。

以上二つの傾向はこれまで関連づけられることが稀であったが、コミックが娯楽として、また情報ツールとして浸透した今日、コミック研究において内在的アプローチとその意義を社会的文脈から下支えする社会文化的アプローチとを関連づけることは不可欠だと思われた。そのため、申請者はこれまでの研究に欠けていた側面を補う意味で、「コミックの文化的認知に関する研究」という本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、およそ1970年代までは低級文化とみなされて学術研究の対象となることがほとんどなかったコミック（マンガ）が、どのように文化的・社会的ステータスを獲得していったのか、あるいはいまだ認知の途上にあるのかという問題を、コミックと芸術、教育、価値評価機構などのかかわりという観点から考察するものである。

本研究の目的は、日本および海外のコミックの文化的・社会的ステータス獲得（またはその挫折）のプロセスを、

(1) コミックの学術的研究の歴史

(2) コミックと芸術機構とのかかわり、主に美術館や賞との関係

(3) コミックにおける「娯楽」的側面と「啓蒙」「教育」的側面

の三つの観点から比較し、考察するものである。

3. 研究の方法

日本および海外のコミックの文化的認知について、

(1) コミックの文化的ステータスの向上（またはその挫折）のプロセスにおいて重要な意味を持つ一次文献の収集

(2) コミックの学術的研究史をあとづけるための文献整理

(3) コミックの文化的認知の「実践」（実験）としてのワークショップ企画などの方法により、研究をすすめた。

平成20年度は資料収集を中心におこない、ワークショップ企画および成果発表の準備をすすめた。21-22年度にワークショップおよび成果発表を行った。

4. 研究成果

19世紀ジュネーヴの作家ロドルフ・テプフェールをモデルケースとして進めた研究と、現代の日本とフランスにおけるコミックスの文化的認知に関する研究とに大別できる。

(1) ロドルフ・テプフェール（1799-1846）は、美術評論や小説、旅行記などと並行して、ヨーロッパ・コミックの原型となるような「版画物語」を1830年代から発表していたスイスの作家である。こうした領域横断的な表現活動を展開するにあたり、寄宿学校長・アカデミー教授でもあったテプフェールは自分自身の社会的ステータスと、文化的な位置づけの曖昧な「版画物語」創作とのあいだの折り合いをつけることを必要とした。そのため、ゲーテやサント＝ブーヴなど著名作家からの評価を利用して「文芸共和国」パリへの参入を試みると同時に、版画物語を「民衆芸術」「文学」「表象芸術」として位置づけるためのさまざまな理論武装を行った。テプフェールの文化的闘争を詳しくたどることで、19世紀前半のスイスおよびフランスにおけるコミックスの文化的認知の困難さを形作

っていた文化的背景を知ることができた。

また、「版画物語」の一作品『フェステュス博士』（肉筆版 1829、版画版 1840）の「小説」形式への自己翻案（1833、1840）の実験によって、テプフェールがジャンルごとの芸術的ステイタスの差異をどう認識したかを考察した。さらに、最晩年の理論的テキスト『観相学試論』（1845）における「版画物語」の芸術的・教育的意義と描線画によるコミュニケーションの効率性の主張について検証した。

（2）日本マンガの受容に関しては、世界第二のマンガ消費国であるフランスにおいて、1990年代以降マンガの社会的イメージや文化的ステイタス、実際の受容のしかたにどのような変遷が見られるのかという問題にとりくんだ。先行研究を検証するなかで、ブルデュエなどの芸術社会学の手法や、インタビューによる質的分析などの方法論の有効性を認識した。対象とする国と時代が異なっても、コミック（的表現）に対する社会からの反応にはある共通した特徴が見られる反面、メディアと通信技術の発達した現代において、コミックの社会に及ぼす影響力が格段に増大し、激しい拒絶反応なども経たうえでコミックの文化的認知が今やかなりの程度獲得されていることを確認した。

また、現代フランスにおけるコミックス（BD）の文化的認知に関するティエリ・グルンステンの研究をふまえて、日仏両国におけるコミックスと諸芸術との関係や、子ども観、大学制度、歴史記述などの観点から今後のコミックスの学術的研究のあり方に関する問題提起をおこなった。平成 22 年 10 月には研究代表者の主催する「ナラティヴ・メディア研究会」にグルンステン氏を迎えて講演会・セミナーを行い、コミックスを学問として論じる場のありかたを探る手がかりとした。

注記：ここ一、二年で、さまざまな文化圏に属するマンガの総称として、英語の comics のカタカナ表記「コミックス」が普及しつつあるため、研究課題名での表記を補い「コミック(ス)」や「コミックス」を多く使用した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

1.

森田直子「コミックスの文化的認知と学術研究の関係について」『世界のコミックスとコミックスの世界 国際マンガ研究』第 1 号、2011 年、13-22 ページ。査読無。

2.

森田直子「諷刺物語としての『ジャボ氏』」『ナラティヴ・メディア研究』第 2 号、2010 年 8 月、67-87 ページ。査読無。

3.

森田直子「新ジャンルの擁護と顕揚—ロドルフ・テプフェール「版画文学」論の背景」、フランス語フランス文学研究、第 97 号、2010 年、149-161 ページ。査読有。

4.

森田直子「ロドルフ・テプフェールのジュネーヴ」『比較文学研究』第 95 号、2010 年、90-105 ページ。査読無。

5.

森田直子「ロドルフ・テプフェールにおける〈ステイタス〉の問題」『マンガ研究』第 16 号、2010 年、102-104 ページ。査読無。

6.

森田直子、「ロドルフ・テプフェールの「版画物語」理論：『フェステュス博士』の自己翻案をめぐる」、Nord-Est（日本フランス語フランス文学会東北支部会誌）、創刊号、2009 年、32-52 ページ。査読有。

7.

オリヴィエ・ヴァネ、森田直子（翻訳と解説）、「フランスにおける〈マンガ文化〉の生産マンガにかかわる領有と実践の多様性についての社会学的考察」『ナラティヴ・メディア研究会報告書 2008 年度』、2009 年 3 月、79-89 ページ。査読無。

8.

森田直子（翻訳と解説）、「ロドルフ・テプフェール『観相学試論』」、『ナラティヴ・メディア研究会報告書 2008 年度』、2009 年 3 月、91-120 ページ。査読無。

〔学会発表〕（計 5 件）

1.

森田直子、「19世紀の絵物語における身体・語り・自己言及」日本フランス語フランス文学会 2010 年度春季大会ワークショップ、平成 22 年 5 月 29 日、早稲田大学。

2.

森田直子、「キーノートレクチャーへのコメント」国際会議「世界のコミックスとコミックスの世界 グローバルなマンガ研究の可能性を開くために」平成 21 年 12 月 18 日、京都国際マンガミュージアム。

3.

森田直子、「フランスのコミック表現におけるフキダシ使用への抵抗」、日本フランス語フランス文学会東北支部大会シンポジウム「欧米文学における声とテキストをめぐって」、平成21年11月28日、山形大学。

4.

森田直子、「ロドルフ・テプフェールの「版画文学」はなぜ「文学」と名づけられたか」、日本フランス語フランス文学会秋季大会、平成21年11月7日、熊本大学。

5.

森田直子、「ロドルフ・テプフェールにおける〈ステイタス〉の問題」、日本マンガ学会第9回大会、平成21年6月20日、東京工芸大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森田 直子 (MORITA NAOKO)

東北大学・大学院情報科学研究科・准教授

研究者番号：40295118

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：